

国語国文学会だより



No.30

2004. 4

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十五年度秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十五年度秋季大会を十一月二十九日(土)、百年館低層棟五階百五〇四教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表) 十時~十二時

熊阪台州『西遊紀行別録』論

本学博士課程後期二年次 壬生里巳氏

『忠臣略太平記』について

本学博士課程後期二年次 宮本祐規子氏

佐多稲子『善良な人達』閉じ込め合う(女たち)

本学日本文学科非常勤助手 小林美恵子氏

◆午後の部(公開講演会)

十三時三十分~十六時三十分

源氏物語と江戸時代

本学教授 鈴木健一氏

平安朝の光と影

——紫式部とその娘 大貳三位を中心に——

作家 永井路子氏

懇親会 十六時三十分~十八時 於 ウイミン

真新しい百年館で開かれた大会は、午後になると席が足りなくなり、隣の教室へ映像と音声を送ってそちらで講演を聞いていただく方が出るほどの盛況でした。

講演要旨

平安朝の光と影

——紫式部とその娘 大貳三位を中心に——

作家 永井路子

京に都が始まったのは七九四年。だが、実際には前代のいろいろなシツポを引きずっており「平安朝」ができたのはそれからしばらく経ってからだと考えられる。

桓武・平城天皇の時代には、奈良時代と同じような激しい血みどろの権力争いがあった。桓武天皇の母は半島系で、外国人から生まれた方が天皇になるまでには様々な波風があった。自身が手を下したわけではないが、先の皇后と皇太子を殺して位を継いだ桓武天皇は、まず奈良の都と決別した。さらに様々な制度の改革を行い、領土の拡大も図るが、これは失敗する。新しい都の長岡京も洪水で目茶目茶になる。そのとき思い当たったのが「崇り」である。先の皇后と皇太子に加え、自分の弟の早良親王も追放し、死に至らしめていた桓武天皇は、それらの人々の崇りにおびえることとなる。

そして次の平城天皇。桓武天皇の息子である平城天皇も異母弟に謀反の疑いをかけ、その母ともども幽閉して殺してしまう。

本当の意味の平安な時代が来るのは、その次の嵯峨天皇の時にあってからである。まず、死刑が停止され、その後約三百年の間執行されることがなかった。法律上は死刑相当の罪であっても、罪一等を減ずるという形をとったのである。なぜ死

刑を執行しなかったのか、説はいろいろあるが、一つには儒教の精神、また一つには仏教の不殺生の考えが浸透したことによる、とするのが表向きの理由である。だが本当のところは、父や兄の姿を見ていた嵯峨天皇が祟りを恐れたためではないか。ともあれ、死刑の停止、これは平安朝の光の部分である。

さらに、大きな争乱がなかったため、古今集や多くの漢詩集など文化的な花が咲いた。嵯峨天皇は文化の推進役となり、実際の政治は藤原氏の手ゆだねられた。裏では暗殺などもあったが表向きは平安で、その中から『源氏物語』が出てきた。

世の中が平和になっても、平安朝の中では祟りや怨霊というものが大きな意味を持ち続ける。その中心が菅原道真である。道真は大宰の権の帥、九州の全体の国の長官となるが、これは名目だけで実際には都から遠く離れた地への左遷である。道真の作った漢詩からは、部屋に閉じ込められて外出もできなかったことがわかる。そしてそのまま道真は死んでしまう。それから中央で起こった事件、御所に落ちた雷に打たれて死ぬ人が出たり、疫病が流行ったりしたことが、すべて怨霊となった道真の祟りとされる。失意のまま死んだ人が祟るという恐れが根深くある。

同じ平安朝でも、時代が下つてくると国家に対してではなく個別に祟るようになり陰湿になる。明るく和やかに見える平安朝にも怨霊と祟りがはびこっているのが影の部分である。また、物事に表と裏があり、それをうまく政治に使っていくと

ころも、平安朝の陰湿な一面で、殺すことがなくなったから良くなった、と一概には言えない。

例えば花山天皇の例。即位して間もなく、非常に愛していた女御が亡くなってしまった悲しみに沈む天皇を、側近の藤原道兼が謀りごとをめぐらせて出家させてしまった。花山天皇が引けば、道兼の甥が位につけるからである。こうして一条天皇は即位する。

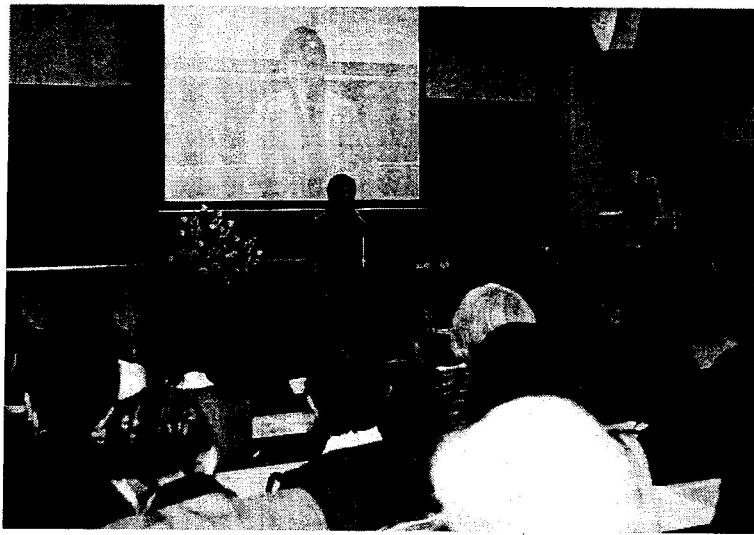


その即位の日、儀式の行われる玉座に化け物の首が置かれるという嫌がらせがあった。本来なら儀式が中止になるところだが、兼家はこの事実を知らなかったことにして一条天皇を即位させる。平安朝にも、祟りなど全く気にしない人もいたということである。

次に紫式部について系図、年表に沿って説明する。紫式部の父為時は藤原家の名門「北家」の系統であるが、それによって紫式部が出世したわけではない。同族仲良くやっているかという大間違い。当時は兄弟同士で戦ったり、足を引っ張り合ったりしていた。花山天皇も兼家から見ると親戚だが、先に述べたようなことをする。そういう時代であった。

為時の身分では、現在で言う閣僚になることはできない。このクラスの人々の目標は、四年務めれば一財産できる立場の国の守、今でいう知事になることだった。だが、淡路の守という蓄財の望めない役に就くことになり嘆き詠んだ詩が一条天皇の目に留まり、道長に口添えしてもらったおかげで、越前の守に大出世した。だから平安朝は優雅なのだと言うが、これも大間違い。実は、越前に来ていた宋の商人を追いつために、筆談で意思疎通ができる学者の為時が任命されたのだった。

為時の家は学問の家で、紫式部も大変教養がある女性であった。紫式部は宣孝と結婚し、賢子を生むが、その翌年か翌々年に夫は亡くなってしまった。式部が『源氏物語』を書くのはそれからのことである。



『源氏物語』によって才女と評判になった紫式部は、道長の娘の彰子の女房となった。彰子は十二歳で一条天皇の后になったが、このとき既に道長の兄・道隆の娘定子が后として天皇に愛されていた。定子は二十歳くらい、天皇より年上で教養もある優雅な人だったので、道長は彰子が心配で仕方がない。それで家庭教師のような役目の女房をつけていろいろと教える、そのひとりが紫式部であった。

また、后のもとを訪れる有力な家来たちがもたらすトップシークレット、女房はその窓口にもなる。こういった女房はただのお側付きではない。自分の夫や子供の出世の後押しをすることもあった。

さて、『紫式部日記』には道長が紫式部のところへ来たことが書かれている。道長が戸を叩いても式部は開けなかった、とあるが、その後のことは書かれていない。その後に何かがあったのか、なかったのか。これには諸説あるが、そのようなことがたくさんあったことを踏まえた上で、大貳三位の話に移りたい。

大貳三位と呼ばれた賢子は宮仕えに出て、いろいろなプリンスと関係ができる。それもハイクラスの相手ばかりである。紫式部は四十四、五歳で亡くなったとされているが、もう少し長生きをしていて、娘に示唆していたのではないかと思う。

清少納言と紫式部はライバルであったが、この二人は共に結婚相手はお金がないと駄目であると言っている。それを賢子はちゃんと実行した。夫は大金持ち、自身も天皇の乳母から典侍従三位になり、女性としての栄華を極めた。こうしてみると、紫式部は裏でうまく操っていたのではないかと思う。美しい文学を書くだけでなく、実力者である娘を育てたのが紫式部なのである。

最後に『源氏物語』をどう読むかについて。この物語の中にはいろいろな問題が含まれている。例えば「玉鬘」巻で、玉鬘が乳母に付き添われて養われる場面がある。なぜ親でなく乳母なのか、

そしてなぜ乳母は玉鬘を筑紫に連れて行ったのかというところに女性史の問題、それから乳母がどんなに大事かという問題、いろいろな問題を読み取ることができると思う。

源氏物語と江戸時代

本学教授 鈴木健一

『源氏物語』は無数の文学作品に構想や表現の点で影響を与えてきました。藤原俊成は、歌人は『源氏物語』から多くのことを学ぶべきだと言っていますし、和歌ではさまざまに源氏取りが行われてきました。散文でも同様で、擬古物語と称される分野で影響を受けないものはなく、そのような例は江戸時代にも柳亭種彦『修紫田舎源氏』を始め多くあります。

『源氏物語』の捉えられ方はそれぞれの時代によって違っています。仏教が盛んになった平安末期から中世にかけては、偽りの好色な物語を書いた罪によって紫式部が地獄に堕ちたとされ、彼女を救うため源氏供養がなされる一方、この書は人々を仏道修行に導くものだという考え方も生まれました。

江戸時代では儒教的な考えが広まり、その影響で、人々を教え導くために書かれたものだと考えられます。しかし、本居宣長は、人間というの

は、そもそも弱い部分を持っているもので、『源氏物語』はそれらをありのまま描いたものなのだから、そこに共感するべきであって、これまでこの

作品の評価基準として用いられてきた仏教的・儒教的な観点は間違っているとして、物の善悪を越えて人間の感情そのものに共感する「もののあはれ」こそが最も大事なのだと提唱します。この宣長の考え方は、『紫文要領』『源氏物語玉の小櫛』という書に記されており、『源氏物語』を考える上で大変重要なものです（『紫文要領』『新潮日本古典集成 本居宣長集』で全文を、『源氏物語玉の小櫛』は『日本古典文学大系 近世文学論集』で最も大事な部分を読むことができます）。なお、江戸時代には、たんなる好色の書と見なす考え方も根強くあり、さまざまな源氏観が存在しました。しかし、多様な受け止められ方が可能なのところもこの作品の強みなのだと思います。

さらにこの時代には、北村季吟の『湖月抄』という使い易い注釈、版本の挿絵や源氏香とその記号も流布し、文化的にも広く認知されました。文学・思想・文化にわたって『源氏物語』文化が大きく花開いたわけで、『源氏物語』享受という点で最初の黄金時代と言うべき時期なのです（たぶん昭和後期・平成が第二の黄金時代でしょう）。

明治時代以降も、与謝野晶子・谷崎潤一郎・円地文子らによって現代語訳が成り、今日でも瀬戸内寂聴・田辺聖子・橋本治らによって試みられて、広く人々に親しまれています。

報告

文学散歩

樋口一葉ゆかりの地・本郷菊坂を歩く――

平成十五年十月二十五日（土）、山梨大学で一葉文学を講じた藤木直実氏（院31回生）を講師に、本郷菊坂界限を歩きました。

当日は、文京ふるさと歴史館で特別展「樋口一葉その生涯――明治の文京を舞台に」の初日。会場には、錦木清方画伯の名作「一葉」をはじめ、一葉愛用の文机、硯箱などの遺品、住居の見取り図など百点あまりの品々が展示されていました。なかでも庄巻は、最後の作品「われから」の未定稿五枚の初公開でした。同じ箇所を五通りに表現する一葉の執念。

その「われから」を完成させた終焉の家。生涯の住居は残っていませんが、「一葉日記」にあらわれる質屋「伊勢屋」、水仕事に使った井戸が当時の様子を伝えていきます。

本郷界限は、関東大震災、戦災も免れ、都内でも戦前の街並みが残る貴重なエリア。しかし新しいビルが林立し、坪内逍遙、石川啄木、宮沢賢治などが生活したことはプレートに記されているだけです。その中で、「縮図」などで知られる徳田秋声の住居が当時のまま残っています。徳田家ゆかりの人が住んでおられるため見学は不可能ですが、戦前の文学者の生活を伝える貴重な文化財として残していただきたいと思います。

昼食後、藤木氏の「一葉の（肖像）」をテーマとするお話を伺い、東京大学総合研究博物館で「シーボルトの『二十一世紀』展」を見学、散会しました。

参加者十名、今回は学部一年生の参加を得、藤木氏のお話とともに、元気をいただいた半日でした。（新妻佳珠子 記）

◆編集より

例年三月末にお届けしている「国語国文学会だより」ですが、今年は一カ月遅れの発行となりました。ご連絡もいたしません、お待ちいただいていた方もいらつしやることと思います。この場を借りてお詫び申し上げます。

また、この時期に葉書でお知らせしていた春季大会の案内が、今回は別刷りで「たより」に同封されております。改めてのご案内はございませんので、ご注意ください。

二〇〇四年四月一日

発行：日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会
〒一一一・八六八

東京都文京区目白台二・八・一
日本女子大学 日本文学科内